

現代日本戲曲大系 3

現代日本 戲曲大系



三一書房編集部編

現代日本戯曲大系 第三卷 定価三八〇〇円
一九七一年七月三十一日 第一版第一刷発行

編者 三一書房編集部

発行者 田川敬吾

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台一の九

電話 東京（二九一）三二三一・五

振替 東京八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷所 第一印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

収録作品の上演については、必ず著者または
著作権継承者に了解を得て下さい。

現代日本戲曲大系／第三卷／目次

1955

島	堀田 清美	七
三人の盗賊	八木柊一郎	翌

1956

ゲイとルン	青江舜二郎	五
英雄たち	秋浜 悟史	八
遠い凱歌	内村 直也	二三
楠三吉の青春	大橋 喜一	二五
畸型児	小幡 欣治	二六
秋	加藤 衛	二四
肥前風土記	田中千禾夫	二五
ちぎられた縄	火野 葦平	二六
鹿鳴館	三島由紀夫	三三

1957

薯の煮えるまで……………風見 鶏介 三五

明日を紡ぐ娘たち……………広渡 常敏 三〇

御料車物語……………鈴木 元一 三〇

死んだやうな平和……………正宗 白鳥 四六

解説……………宮本 研 四七

解題・付作品一覧…………… 四三

演劇略年表(1955~1957)…………… 四七

装幀 坂口顕

凡例

- 作品は初稿雑誌発表年月（但し活字発表のない作品は初演年月）を基準に、同年内では作者名の五十音順に配列した。なお、年号は西暦で示した。
- 作品は原則として新漢字新かなづかいにあらためた。
- 明らかな誤字・脱字は訂正したが、送りがな・表記の不統一は原文どおりにした。
- 文中の＊および注番号は原文に従い、該当作品末尾に注釈として付した。
- 幕（場）数、登場人物・時・所の表記は原文どおりにした。

現代日本戯曲大系 第三卷
(1955~1957)

島

三幕四場

堀田清美

人物

栗原ゆう

学(その子)

史(その娘)

大浦(その弟)

川下さん

菊夫(きんの長男)

邦夫(きんの次男)

新谷正

清水徳一

毛利(中学図工教師)

山岡先生

木戸玲子

場割

一幕一場 栗原の家(三月下旬)

二場 山の上(翌日)

二幕 栗原家(五月中旬)

三幕 同 (翌年三月)

第一幕

第一場

栗原の家。

下手の低いれん瓦塀を利用して作った石の庭は、亡くなったこの家の主が、工廠の休日に海と山から好みの姿の石を運びこんでつくったもので、

その築山の石と石の間に、不釣り合なほど大きく育った紅葉が一本ある。はかは、つつじ、くちなしのようなものが数本。庭の奥の木戸に近い桃の木の花が美しい。木戸を出たところの左は石段で、それを下りたところは坂道。従って、この家の庭に立つと、密集した屋根越しに、船の行きかう瀬戸、左手瀬戸を出た先に工廠跡の工場の一部が、右手は入江と、伊予に通じる南への海面が見える感じ。

庭に面してL字型の縁側がある座敷。縁側に古い藤椅子。座敷の正面向って左は床の間で今は学の本棚とそれをはみ出した本。壁に丁定規と三角定規。本棚の上にラジオと地球儀。床の間の前に机。右は四枚の観音開きの襖。それには正信偈の一節が大きく書いてある。この中の仏壇の立派なことは、いわゆる安芸門徒の、信心深い家であることを感じさせる。そのなげしに

時 一九五一年春から翌年の春にかけて

場所 呉に近い島

は紋付を着た亡父の肖像画と勉の子科練姿の写真。座敷の隣りは居間。中央に炬燵。その正面は、左は玄関、右は板の間とたたきのある台所へ。居間の上手は押入れと、寢室への襖。

赤い夕日がすごく印象的な美しい光をなげかけている三月下旬の夕方。居間の切り炬燵の傍で、ゆうが内職の網縫いをして、毛利が糸車から竹針に網糸（タコ糸）をとっている。一日の労働を終えてわが家へ帰る人々の気持を表現しているかのような渡し船。夜の漁を急ぐかのような漁船の音と、瀬戸を通過する客船の音と警笛とが、近く遠くきこえてくる中で、すぐ近くの道を「いわしやいりまへんか、いわしやいりまへんか」と小走りに売り急ぐ女の声がきこえてくる。

ゆう　ほんとうは、清盛祭は、閏年にやるんですが、の、旧暦の二月の大潮の日に。死んだ勉が一年生の時くじが当って馬に乗せたんですよ。つまり家老ですよ。女の子が殿様で籠にのって。かわいらしいですよ。

毛利　大名行列ですか。

ゆう　写真帖がどこかに有る筈じゃが……（床の間を探す）

おきん　（台所から顔を出す。彼女は働き者で、どこかに男性的なたくましさを持っている。現在は妊娠八カ月位である）栗原のおばさん。毛利先生、手伝いですの、鯛を持ってきたが、刺身にしますか？

ゆう　今夜は学が居らんけん、煮付けにしようかのう。

おきん　どこかへ行かれたん？

ゆう　森田の嫁取りへ呼ばれたんよ。

おきん　先生はどういう関係？

ゆう　同級生よの。祝言も昔どおり派手になつてどうするんでう。

おきん　成金は派手なことがしたいんよの。鉄でちいとばかし金を儲けたけんいうて、調子げらしなあ。陰で人が言いよるわいの。ゆう　貧乏人は当分祝言も出来やせん。

おきん　道具ばっかり飾つて、伊予の方の百姓の娘じゃげなにおばさん。

ゆう　ほうか。

おきん　顔を見りゃ分る。頭だけいどころわい。（流しへ行つたらしい）

ゆう　あれの亭主が馬の口取りでの、輪卒の上等兵じゃけん。男まへはええし、馬を扱うのが上手での。口取りの七ちゃんいうて……。

戦争になつてずっとやらのじゃけん何年になりますかの……。昔は町中が呉工廠の職工みたいなものでしょうが、漁師も、元手を持つた人間は春先になると朝鮮へ鯛をとりに行

くし、島に残つた者は豊後水道の方まで漁に行つたんですけんね。来年は県会議員の金田さんが骨を折られて、県から補助金を貰うてやるいう話ですがの。昔は清盛祭いうたら、大阪の方から見物に來た程ですけんね。寄付金を集めるいうても、一軒平均五十円にして千軒で……五万円ですか。百円と出せる家は少いでしょう。

毛利　平清盛を祭るんですかね。

ゆう　さあ、昔は漁がよくなるように、いうてやつたもんじゃが……。清盛塚の御神体は白蛇ですけんね。

毛利　あ、そうですか。

ゆう　海の神さんじゃろうのう……。瀬戸を掘つたのは平清盛じゃいう話ですがのう。（間）来年の清盛祭にはお父さんとお母さんをよんであげなさいや。喜んでです。

毛利　村から出たことがないんですけんね。

おきん　流しへおいといたけん、猫にやられんようにしんさいよ。

ゆう　おきんさん、あんたは知らんか。清盛祭は何の祭でう。

おきん　清盛さんの祭やうの。平清盛が宮島の神さんになれて、「一日で瀬戸を掘りあげたら嫁さんになつてやる」という難題をもちかけられての、朝の陽が登るのを合図に始めてもうちいとで終るといふ時に、陽が西の山に傾いた。（西の空を指して）丁度今頃の時間よの。いかな清盛さんでも天とう様だけはどうすることも出来ん。ところが女子を思う一心よの、岩の上へ立たれての、扇をかざして「返せ給え返せ給え」と天とう様を呼び戻された。そしたらあな不思議や！ 天とう様が戻られてのとうとう一日で掘り上げることが出来たんですよ。「さあ約束通り嫁さんになつてくれ」

宮島の神さんは頭を横にふられての、「天とう様を呼び戻すような人のところへは行けま

せん」清盛さんは真赤に怒って刀を振りあげられた。たつた今まできれいなお姫様じやつた宮島の神さんが竜に化けられての、大きな口を開かれた。清盛さんは命からがら逃げたんよの。その時はどうにか助かったんじやが、天とう様を呼び戻したばかりで、大熱病にとつたかれての、何百貫いう水で冷しても下らんのじやと。何でも大層な苦しみようで死なれたらしいの。この世で、神じや、仏じやいっても日輪様が一番えらいんですけんね。そのお天とう様を招き返す様な無理なことをしたんですけんね。清盛さんいう人は、えらいこととえらかったんじやろうが、余つ程大けな罰が当たったんですの。氷を頭にのせたら、みる間に湯気が立ったいうんですけんね。

ゆう 今でいやあ、ピカをうけた時の熱みたいなんもよ。

おきん そういや、ほんまじや！

ゆう 似ノ島から連れて戻った当座の学の熱いうたらのう。うわごとばかり言うて……

おきん (毛利に) 体温計が狂うとるんじやろういうて、……新しいのを買うて来たんですよ。四十度以上の熱が一カ月近う続いたですけんね。

ゆう 一カ月も続きやすまい。

おきん おばさんは看病に夢中で、日にちも何も分らんようになつとったんじやけん、わしの方がよく知つとる。間で、何回か脈が切れたんじやけん。(間) 先生もよう生きられたが、

お母さんの看病いうたら、そりや、普通の人じや、とてもとても。しつかりしとつてじやけんね。史さんが小学校へ上つた年におじさんが死なれて、ずっと、女子手一つで三人の子供を育てられたんですけんね。

ゆう 何の話をしよるんかあんたは。

おきん ?

ゆう 清盛祭の話をしよったんじやろうが。

おきん あれッ(からからと笑つて) うちやあどうしようかしらん。

ゆう これじやけんのう、女子の話はまとまりはつきやせん。

おきん おばさんが悪いんよの。人の話を横取りするんけん。

ゆう どこからおかしうなつたんでのう。

毛利 清盛が太陽を招き返した罰が当つて、大熱で死んだとこで、ピカの話になつたんじやないですか。

おきん それみんさい、やつぱりおばさんじや。

邦夫 (台所から) お母ちゃん、御飯たけたで。

おきん すぐいのう思うてきたんじやに。(と言

いながら去る)

邦夫 (上つて) 先生、かしてみんさい。こうや

るんで。(毛利より余程手付きは早い)

ゆう 邦夫、高等学校へ行かせて貰うて、ええ

の。しつかり勉強して、お母ちゃんに楽をさせてあげんさいよ。妹弟が多いんじやけんのう。

邦夫 うちのお母ちゃんは どうしてあがいによ

うけ子供を生むんでのう、はあ生まんやええのに。

ゆう 今頃の子供はしつかりしての、言うことが違う。

邦夫 知恵が足らんのじやろうで。

毛利 お前、将来何になるんや。

邦夫 まだ分るかいの。高等学校へ合格したば

つかりで。あわてて死んだ人間は多いんで

よう。……勤めながら、夜間の大学へ行きた

いの山々じやがの……

ゆう 余り欲張らんでもええよ。

清水が庭に登場。

清水 おばさん、ごぶさたしとります。

ゆう ……どなたの？

清水 清水です。清水の徳一です。

ゆう (驚いて) 徳ちゃんか！ ……(縁側に急いで行く)

清水 おまめにやありますか。

ゆう 永うみなんだのう……(しげしげと見てい

る)

清水 (家の中、庭を見廻している) ちつとも変つ

とらんね。

ゆう いつ戻ったん？

清水 さっき。呉へ二時半ですかね。便利にな

つたですな。

ゆう バスが工廠の中を通る様になつたけんの

う。

清水 びっくりしたですね……。工廠の中を通

つたの生れて初めてじゃけん。昔は海軍の要

寒地帯で通れなんだ。よう考えて見りや、終戦から六年経つとる。

ゆう まあ上りんさい。

清水 みんな元気ですか。

ゆう 勉が戦死しての……

清水 ……

ゆう 予科練へ行つて……、あの写真がいとまごいよの。(写真の下へ行き、じっと見つめる)刀を買うてやつたら喜んでの、早速写真を送つてきた。

清水 ええ子じやつたのにね。

ゆう (邦夫を指して) あの子くらの年頃ようの。

清水 仏さんを拝まして貰いましょうか。

ゆう 勉が生きたりや、なんぼか喜ぼうに。

(念仏をととなえながら、仏壇を開く) 勉 徳ちゃん……

清水 (仏前に坐つて手を合わせる)

ゆう 「お母さん、わしが戦死しても泣きさんさんなよ。どうせ天皇陛下から預つとった子じやけん。靖国神社で逢おうや」いうての……。わしに内証で予科練へ受けたのが、気にかかつとったんじやろうで。あれが生きてつてくれりや、わしも心強いんじやに……

(間)

清水 おばさんは一つも変つとらんね。

ゆう 婆さんになったよの。

史、掃牒。(ばつとした美人ではないが、利口そう、どこか少しかげのある娘) 仏前の方を

のぞく。

ゆう 史さんは覚えてるか？

史 (手をついて) 今日は。お帰んなさい。

清水 ええ娘さんになったね。

史は奥の間へ着替に入る。

ゆう (仏壇から菓子下げ) 寺から彼岸の下がりもんじやが、こつちへ来て食べんさいや。

(炬燵の方へ行く。毛利を指し) この人はの、中学校の絵の先生で遠慮する様人じやないんじやけん。

毛利 (顔を下げる。カバンから書類を出して) これ、ピカさんに渡しといて下さい。

ゆう ゆっくりして行きなさいや。

毛利 下宿のおばさんが待つとつてじやと悪いけん。(清水に) 失礼します。(去る)

おきん (台所から来て) 邦夫。——お客さんの？

ゆう 清水の徳ちゃんよの。

おきん うんうん。(清水に) おまめにやあります。あなたはお上の方で出世しとつてじやうです。今どこにおつてですか。

清水 東京です。

おきん わたしを覚えとつてですか。

清水 (笑つて) 覚えとりますよ。

おきん 邦夫、この人はの、栗原先生と小学校同級で、苦学して出世されたんで。(清水に) これが今年高等学校へ合格したんです。わしらの暮しじや行かさりやせんのですがね、「もつたないけん行かせ」いうて、ここの

先生が。中学で委員をやりよつたんですけんね。菊夫がの、あなた、……

史 菊夫いうて分りやすまいで。

おきん この兄ですよ。その菊夫がねあなた、自分が中学しか出たらんもんじやけん「どうしても高等学校へ行かす」いうてきかんのですよ。卒業したら就職をお願い致します。

(丁寧に頭を下げる) 邦夫、よう頼んどぎんさい。頭を下げてやわりや！ (頭を押さる) よいよ田舎者ですけんね、挨拶もようせんのですよ。一人ぐらい東京へ出て出世して貰わんことじやの。で、奥さんは東京のお方ですか？

清水 (笑つて) まだですよ。

おきん まだ一人？ ほんまに一人の？ (史をみて) 史さんと丁度似合いじやにの。

史 ちいと黙つとつたらおばさん。

邦夫 お母ちゃん！

おきん 当分おつてね？ ゆっくりして行きなさいや。私がかれいのおいしいのを食べさせてあげますけん。瀬戸内の魚は格別おいしいですよ。春はかれいがシュンですけんね。

邦夫 お母ちゃん！

おきん この辺にはなかなかえ就職口がないんですよ。男はどういうても都会へ出んにや駄目です。この先生ものあなた、せつかく高等工業まで行かれて、ピカドンでやられての。ピカを受けとらにや、今頃は課長ぐらいに出世しとつてですよ、おばさん。覚えとりま

すよ。あなたと一番をあらそいよったのです。

新谷が庭から登場。

新谷 徳ちゃん！

清水 やあ。

おきん のう立派になって。

ゆう 勉が生きたりや正さんと同じじゃけんの。

史 やめんさいお母さん、死んでしもうた人間のこと。

おきん おばさんは苦労されたんじゃけんね、

たまにはぐちも出るよ。

清水 栗原は原爆をうけて……もうすっかりええんですか。

ゆう 三年余り何ともないようながの。

清水 助かって良かったですね。

おきん 私が広島から知らせに戻ったんですよ。

清水 おばさんも？

おきん いいえのう。妹ですよ。妹もピカで死んでしまいました。爆心地に近かったですけんね。二日探して、とうとうみつからんのですよ。

清水 学校は御幸橋の停留所から入ったところでしょ。

ゆう 鷹の橋と大学前の間を歩きよってやられたんよの。何でも、もうちいと中心に近かったら絶対に助かつたらんいう話よの。

新谷 鷹の橋は丁度、一・五斤一寸のそこじゃわいね。統計によると、半径一斤以内は全滅でね、四斤までのところは、五十パーセントが確実に死亡して、あとの五十パーセントの

うち、運のええ人が助かつとるらしいね。

ゆう 仏様のお蔭よの。

おきん なあにおばさんの力よの。おばさんがおらんんだら、とてもじゃないが助かつとってんないよ。……似ノ島から戻られた時は、生きた人間の姿じゃなかった。虫の息で……

背中がべろつとむけて、白身が出ての、そこへ蛆がわいとったんじゃけん。

ゆう 今思い出すと、身ぶるいがするのう。

おきん 広島町の町をあげちゃ歩かれななだでしょう。わしゃ、ようまあ二日もおったことよ。今なら、何万円やるいうてもよう歩かんが……。(間。身震いして、しかめっ面をする) 一人一人顔を見て歩いたけんの。人間の顔じゃなかった。

清水 おばさんは当日広島へ行ったんね。

おきん あけの日に行ったんよね。六日の晩、下駄屋の大將が傷だらけになって戻られての。二部隊の将校さんじゃったけん、呉までトラックに乗って戻られた。広島は全滅じゃいうて。七日の朝一番の船で宇品に行ったら、機橋は、はあこの世の姿じゃないんよの。——その日と、次の日、二日広島町の町中、妹を探して歩きました。

清水 放射能は、まだ消えてなかったらうにね。おきん そりやすわんことはなかるうでの、二日もおったんじゃけん。

新谷 下駄屋のおつちゃん、一月程して、血をはいて死んだんじゃけん。

ゆう この島でもようけ死んだよの。榎本のお嬢さんは、姉妹で県女の寄宿舎へ入って死なれたし、中谷のおごうさんは、五日に息子さんに面会に行かれて、戻る言いはれたんじゃげなに、泊られての……運がなかったんよのう。

おきん 一々そがいなことを言いよつたら、きはありやせんよう。町にころげとった死体の数を見たら、普通の人間なら腰をぬかすようの。はらわたがとび出て、それを持ったまま死んだ人間やら、……言うに言われんようの。じゃがのう、母親が、子供に乳房をふくませたまま死んでの、どういうはずみでのう、子供が何にも知らずにその乳をすいよる……(両手で顔をおおう。歎息。腹をなでて) わしの子供に、あがいなめにあわせとうないのう……(乳をもむ)

問。 陽が西の山に入って、空だけが赤い。

ゆう アメリカも罪なことをしたもんよの。

(間) 新谷 今は、広島型の何百倍いうんが出来よるいう話で。水素爆弾いうんじゃげな。

おきん 何のためにそがいなものを作りやがるんかのう。おどえらが一回受けてみりやええんで。そうすりや、よう分るけん。

ゆう 誰の上じゃろうと、あがいにむごいものは二度と落さん方がええ。罰が当らずにおろうかい。

清水 (史に) 栗原はどうやって助かったの。

史 似ノ島からお母さんが連れて帰ったんよね。

おきん 先生? それがのあなた、妹がみつからんもんじゃけんくたびれてしもうて食う物

も食わずに探したんですけんね。九日の朝宇

品の棧橋で船を待ちよつたら、「栗原いう

高等工業の学生が、六日の夕方、似ノ島へ渡

ったけん、便があつたら誰かに言伝けて呉れ

いうて頼まれたんじゃが、心当りはないか」

いうんよの、棧橋の人が! 妹の死んだのも

忘れて、とんで戻ったよの。朝早う一本釣の

船を頼んで、おばさんが一人でむかえに行っ

たんよの。戻つて来てわしに大きく目の目玉よ

の。「どうせきいてくるなら、はつきりきい

てくりやええのに!」いって、泣き泣きわし

を怒りんさる。わしやほんま、あの時くらい

おばさんが憎らしかつたことはないでよう。

わしも妹が見つからんと悲しい思いをしとる

のに、自分勝手なことばかり言うて……

ゆう そうは言うが、悲しかったでよう。毎日、

一日中仏前へ坐つて暮したんよの。……耳元

で、学がわしを呼ぶ声がやまんのじゃの。何

でももう一回行つてみよう思つて今度はおき

んと史と三人で探しに行つたんよ。やつぱり

分らんよの、「似ノ島へ着くまでに死んだ

んでしよう」受付の兵隊さんがとり合つてく

れんのよの。名簿にのつとらん言われるんよ。

おきん くそうて、何とも言えんの、あそこの

においは。

史 みんな顔がむくんでね、うなるいうかね、

うめくいうんかね、眼を開いとる人はね、う

らめしそーに、私の顔みるんよね。やめよ

う、こんな話、夢をみるわいね。

おきん 母親ようの。しまいにや、山にして焼

きよるところへ行つて、(手まねしながら)こや

つて調べるんじゃけん。

ゆう のう、人間の最後とは思えん。ごみを燃

すんと同じじゃ。(手を合わせて念仏をとなえる)

……(間)……何でも、もう一回思つての、

「学よーい」「学よーい」いうて……そしたら

あんた!「お母さん!」いうて。(泣く)手を

あげての(絶句する)……(間)

おきん うれしかったのあの時は……(おきん

も涙を拭く)

ゆう 平生寺詣りをさせて貰うお蔭ようの。仏

様が導いて下されたんよの。

おきん いっそ、それじゃ。人に苦勞させとい

て、みちびいたのは誰か。この世で仏さんが

何の役に立つかいの。

ゆう そがいなことを言いよりんさい、今に地

獄へ落ちるけん。

おきん 死んでからどこへ行こうと、生きるこ

とが先よの。のう史さん。(笑う)

邦夫 お母ちゃん! (袖をひく)

おきん (邦夫の頭を押し)子供は黙つとりんさ

い!

新谷 劇的なよの。

べさせんさいや。

おきん 一人で食べえやの、子供じゃあるまい

し。手を持つとるんじゃろが! お母ちゃ

んお母ちゃんいうて、やかましなあ。(清水に)

お邪魔しましたね。話しにきなさいや。

新谷 ヘイ! 菊夫。明日ええのう……

菊夫 仕事で駄目じゃ。

新谷 日曜日で明日は。

菊夫 そういうても駄目よの。

新谷 十二時に中学のグラウンドへ集合じゃけん

の、出来るだけ来いや。

菊夫 うん。

川下一家三人、去る。

新谷 徳ちゃん、わしらもいのうや。腹がへっ

た。(庭へ下りる)

ゆう のう、おばあさんが喜ばれたらうで……。

あんたのことを口ぐせの様に言いよられた。

誕生前のあんたをふところへ入れて、貰い乳

をして育てたんじゃけんの。

清水 ……なかなか恩返し出来んもんですね。

ゆう 島へ戻つて、めんどろを見てあげんさい

や。

清水 そうしようかと考えてもみるんですがね

え……。東京へ連れて行くわけにもいかんし、

……栗原によろしう言うとなつて下さい。

ゆう 学が喜ばうで。(二人去る)

ゆう は歎息をつく。風の去つた後の静けさのよ

うな間。二人無言のまま、我にかえつたように、

ゆうは仏前に行き、夕の燈明をつけ、静かに念

仏をとなえる。

史は手早くエプロンをつけ、網など片づける。その手元は、さすがゆうに仕込まれたものの様である。

ゆう (仏壇をしめて) いつまでも一人でおりや、なおのこと、ピカじゃけん嫁が貰えん思われようしのう……

史 —— (ゆうを見つめる)

ゆう 念仏をとなえるあとからぼんのうがわいてくる…… (手を合わせて、又念仏をとなえる) 間。

史 独りで何を気をもみよるんね。(笑って) お母さんの趣味じゃわいね。

ゆう (氣持をかえて) 徳一は見ちがえる様になつてのう。

史 やつぱり都会へ出にや駄目じゃね。

ゆう 体がのう……

史 そんなことを言いよつたら、一生何にも出来やせんようね。

ゆう わしが生きたる間はええがの。

史 そういう考えはちいと変えた方がええんじやないお母さん。

ゆう あんたはそう言うがのう……

史 お母さんがえらすぎるけん、いうて、嫁に来てがあまりやせんよ。

ゆう そうかの。姑より小姑いうで。学のところへ来てくれる様な、ええ嫁が有りやええのう……

史 兄ちゃんは自分でみつけるつもりじゃない

かね。

ゆう (間) わしや、あんたと一緒に暮したいがのう。

史 養子?

ゆう まさか。

史 (笑って) こぶつきの嫁入りね。……貰い手がありや、それでもええよ。

ゆう ……当分、貰うじゃやるじやいうことは考へんことにするんじやのう。もうちいと我慢しようでう。誰か玄関へ来た様ながのう。

史 (玄関へ立つて) 玲ちゃんよね。
木戸玲子、史の後から登場。

玲子 (風呂敷包を出し) 弟の合格祝いのしるしに。

ゆう 御心配されんでもええですのに。

玲子 先生が受持ちじゃったおかげじやいうて、ゆう それじゃ預つときましようわい。史さん、何か菓子でも買つて来んさいや。

学、掃宅。史、去る。

ゆう 木戸さんから、礼を貰うたんで。

学 すみませんのう。——ありや、よそは結婚式のよばれじやいうのに、うちは仏さんの菓子じや。捨てんさい、うもうもないものを。

ゆう ばちが当るで学。(と言いながら片づける)

学 (笑って) これ以上罰は当りやせん。御馳走じやつたでお母さん。刺身はまぐろとさわらかの。小鯛の浜焼、吸物、はもの酢のものに、えびのフライと串焼。さざえの壺やきと、いかの焼いたのが有ったの。うま煮とそれに巻

ずし。おお、たこがあつた。

玲子 それ、みな食べちゃったん、先生?

学 食べたんじやろうの、食べるものがないようになつたんで先に帰つたんじゃけん。

ゆう 征露丸でものんどきんさいや、無理に食べんでもええものを。

学 育ちはあらそわれんものよ。

ゆう (笑いながら) 台所で噂しよるわい、中学の先生のくせに、いうて……。恥ずかしいでよう。

学 健康な証掘じや思うて喜びんさい。

ゆう お茶づけでも食べるか?

学 (笑って) これじゃけんものう。

玲子も笑う。ゆうはしばらくして自分の言つたことに気づき、声をたてて笑う。

ゆう のう、親程馬鹿なものはない。

学 わしや、親程えらいものはないと思うとつたんじやがの。

ゆう (台所へ立つ)

玲子 先生、あけてみなさい。何じや思う?

……私が買うてきたんよ、広島で。

学 (開いて) ほう。

玲子 着てみなさいや。

学は白いトックリのセーターを胸にあててみる。

玲子 (スーツを開いて) 先生。(揃いである)

学 (台所へ行き) お母さん。

ゆう あれッ、はあ開けたんか。高いものをのう。……ええの。(さわる)

学 (大げさに) いらいんさんな、汚れるけん。(戻ってきて) 宜敷う言うとつてや。

玲子 ——先生、お嫁さん、きれいじゃった？
学 ——花嫁も日本的でなかなかええもんじゃ

のう。見捨てたもんじゃないで。——あんたにきせたらどんなになるかの？一寸人形みたいじゃろのう。……あれを着ると不美人でも美人に見える。

玲子 まあ。

学 島田いうんか。じゃが、あれがかつらじゃ思うと一寸興ざめよう。

玲子 どうせ興ざめです。ええ不美人です！

学 どうしたんや？——（笑って）そういう意味でいうたんじゃないんで。

玲子 知らんわいね。

学 馬鹿じゃのう。森田のお嫁さんのことで。

玲子 ——友達のお嫁さんのこと、そんと言うもんじゃないよ。

学 事実じゃけんしょうがないよ。

玲子 私が子供の時ね、角かくした花嫁姿が最大の夢じゃったんよ。「大きくなつて何になる玲ちゃん？」「オヨメサン」（笑う）今でもあの姿をみるとぞくぞくするわいね。

学 早うむごさんを探したらにやいけんの。

玲子 馬鹿ね、先生は。

学 角かくし、象徴的なよう。女に角があるのを結婚式の日にはわざと隠しますが、明日からは遠慮なしに出さして貰いますけん……おちよ、口して、すましとるが……おお、あわれなる男性族よ。

玲子 大げさなよ。先生は何でも理屈をつけると気がすまんのじゃけんね。

学 要するに知識欲が旺盛なんよ。語源を調べてみたらう。（床の間から辞苑を取り出し）つ、つのかくし。名詞。昔、婦人が寺詣りの時、嫉妬心をとめる意味から用いた一種の冠りもの。ほら、やっぱりそうじゃ。

玲子 すごいね、先生は。

学 現在は転じて、婚礼のときに花嫁が用いる髪飾り。……へえ、寺詣りから出たんよのう。寺詣りと花嫁。成程。（笑う）考えようによつてはほえまじいの。一生に一べんくらい、しおらしい恰好をしても罰は当りやせん。

玲子 先生は案外封建的などがあるんじゃね。

（いたずらっぽく笑う）

学 （笑ってごまかす）玲ちゃんはどうか？ 見合結婚じゃろのう。

玲子 どうかね？（笑っている）先生は？

学 勿論恋愛結婚よ。仲人や何かに委されようかい。

玲子 見合結婚でも付合うわいね。半年とか一年とか。

学 見合いをする前に、ある程度決められる。

玲子 そりやそうよね。一生の一番大事な問題ですからね。

学 問題なのは、人物本位でなしに、家柄とか財産ではねられるということよ。——木戸家もそうじゃろう。

玲子 そうかも分らんね。何でも本家のおじい

さんに伺いを立てて、初めて決るんじゃけんね。木戸家の天皇陛下じゃけん。

学 ——じゃ、玲ちゃんに誰か好きな人がおつたとして、人物本位で結婚しようとしても駄目じゃの。

玲子 そういう時はどこまでも頑張るよね。それでも駄目ならとび出すわいね。

学 へーえ。

玲子 それでなきゃ、ピカ先生の教え子とは言えんでしよう。（笑う）

学 えらい！——じゃが、言うは易く、行いは難しで……。少くとも玲ちゃんが決めるであらう人間は、木戸家にとって資格はない。

玲子 そうとは決つたらんね。

学 仮にで、仮に毛利先生が……

玲子 毛利先生が？

学 仮定じゃけん。——まず、彼が果して毛利元就の子孫であるかどうか、が問題となる。

誰かが、彼の田舎へ調査に派遣される。そこで、彼の親父が指物大工であることが発見される。毛利元就の子孫が大工である筈はないという驚くべき結論によつて、彼が如何に好人物であり、将来有望なる画伯であるかということは全く無視されて、失格するのである。

玲子（笑いがけ）先生じゃったら？

学 勿論、あつという間に断られる。

玲子 何故？

学 そりやよのう……。財産がないし、家柄がつり合わん。木戸家は旧家じゃけん。